

---

# Powered play!

植坂仕草

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Powered play!

### 【コード】

N6803I

### 【作者名】

植坂仕草

### 【あらすじ】

五メートルくらいの人型兵器が重力無視して飛んだり物理法則無視して戦ったりする話だったりしますが何か？

空。

見上げる限り、一面の青色……というよりも空色の方が正しいか。彼はシートに座り、二本の操縦桿を握りしめながら、自然の色合いを堪能していた。実際にはモニター越しで見ているため、本当の意味での『自然』とはほど遠いのだが、そんな事は彼にとってどうでも良い事だった。そんな物があるうがなかるうが、頭上に広がっているのが空である事には変わらない。

『おいスヴェン！ そっちに何匹か向かったぞ！』

その空よりも近い位置にあるスピーカーから、怒鳴り声にも似た通信が入る。

「……………」

『聞こえてねえのか！？ さつさと墜とせ！』

「わかったよ……………」

彼はいかにも面倒くさいとでもいうような、緩慢な動作で足を動かしてペダルを踏んだ。

「さあて、行こうか、相棒」

呟いた直後、スラスタから噴射される炎の振動がシートを振るわせると共に、上方向からの強烈なGが彼の身体をそこに押しつける。機体が上昇しているのだ。

全身を締め上げられるような圧迫感に身もだえしながらも、彼、スヴェンは操縦桿から手を離しはしなかった。その程度の障害などさしたる問題ではない、むしろ彼は開放感を感じている。

『おい、何を』

スピーカーから戸惑うような声が聞こえてきた。

（何をするか？ そんなもん 決まってるだろうが！）

通信を切ると、すぐさまスヴェンは操縦桿を放り、コックピットの右側面に並んでいるレバーを二、三連続して引いた。それとほぼ

同時に足でペダルを思い切り踏み抜く。

瞬時にモニターに映る空が回転し、機体が下を向いた。黒みを帯びた青色、眼前に海が広がる。

と、その上を高速で移動する丸い物体が三つ。

「……あれか！」

『砲撃型フロート』、その物体の名だ。ボールのような球体から砲身が四方に突き出ている。

「……………よし！」

スヴェンは右手でボタンを押してモニターに一つのウィンドウを呼び出した。左手をモニターに向けると、片手だけで素早くキーを打っていく。

『使用武器選択 B W - 001 携帯型コイルガン』

という表示が一瞬だけ流れ、ガコン、という振動がシートを揺らした。ロックが解除されたのだ。

操縦桿を握り直し、動かして機体の腕を背中に回す。

「さあて……………」

超高速で動くフロートに狙いを定め、一拍おいて、親指にあるボタン トリガー を引いた。

バシユン！ という音が鳴った、と感じた瞬間には既に、三機フロートの内一機が粉々に爆算していた。

「次！」

瞬時にそのすぐ近くにいるフロートに向けてコイルガンを二連射ダブルタップ。果たして狙いは外れていなかったらしい。残る二機フロートも鮮やかなオレンジ色の炎を吹き上げて散っていった。

通信を切ったはずのスピーカーから、声が発せられた。何故、という疑問はすぐに解決されることとなる。

『 は終了だ。各機帰投せよ、繰り返し 』

聞こえてきたのは切った馬鹿からの通信ではなく、基地からの帰投命令だった。

「しっかしよお、やればできんじゃないか。なにしてるんだお前はよ」

基地に戻り、機体から降りたスヴェンに話しかけてきたのは彼の同僚のスリングである。彼は誰に対してもこんな口調を一貫していた。ちなみに先ほどの訓練での通信元も彼だ。

「……………空を見てた」

「かーっ！ という声を上げながら、スリングが頭をかきむしる。わっかんねえ！ お前は どうして そうなんだよ！」

「良いぞ、空」

「そういう問題じゃねえよ、俺が言いたいのはだな……………つまり……………」

「あーっ！ もう！ と叫び、目を一旦瞑ってから後ろを親指でさして口火を切った。

「お前は俺よりもアイツを操縦する才能があんだぞ！？ なんてそれを活かさねえんだよ！」

「アイツ、とは今の今までスヴェンらが登場していた機体の事である。」

量産型空戦用 P S ・通称『スカイユニット』パワードスーツ。

数年前にもたらされた技術革新によって生まれた人型兵器だ。全長は五メートルほど、その名の通り空での戦闘をメインとした兵器である。主な兵装は巨大な針のような弾丸を超高速で撃ち出す携帯型コイルガンと近接格闘用の高周波ブレイド。

現在の戦場ではこのような人型の P S が兵器のシェアを占めている。パワードスーツ

「そんな事ない、そっちこそ大分墜としただろ？」

「俺は攻撃命中率が三割を切ってる、お前は何だ？ 八割だぞ八割！ こんなべらぼうに高い数値をたたき出してる奴なんざお前以外に見た事ねえぞ！？」

「……………」

「まあ、いい。とにかく開発部に行ってデータ貰ってこいませ」  
「……ああ」  
二人は並んで歩き出した。

PS ヒトガタヘイキ(後書き)

とりあえず、いつまで続くかわかりませんが、いつ更新できるかわかりません。未永くよろしくお願いいたしますと言えませんが。

## 訓練と実戦 センジョウ

「は？ 実戦……っすか？」

訓練の解析データをプリントした紙に目を走らせている上司の言葉に、間の抜けた声を上げたのはスリングである。

それに対して革張りの椅子に座り、姿勢をまったく変えないまま応じたのはスリングが声を出す原因となった言葉を放った女性。

「ああ、そうだよその通り。みなさんお待ちかねの実戦だ。……っつても相手は所詮フロートだし？ 訓練とそんなに変わらんけどな」  
流れるような黒髪を手でいじくりながら、その清楚な風貌とはおよそ似合わない乱暴な男言葉でそう言った彼女の名はロイズ。スヴェンとスリングの上司であり、指揮官だ。

「いやいやいや、随分と変わるだろ。訓練じゃイカダフロートが使ってたのはそれ用の非殺傷製ペイント弾だったし、実戦ってこたあ相手は実弾を使ってくるし、下手すつとサウス共のPSと遭遇するかもしれないじゃねーか！」

サウス、とはスリング達軍人が戦っている相手で、実際にはちゃんとした国名があるのだが、彼らは蔑称として「南の人間サウス」という呼称を使っていた。

スリングの慌てようを見て、ロイズはからからと陽気な笑い声を上げる。そしておもむろに懐からライターを取りだして、しゅぼつ、とタバコに火を付けた。大きく吸い込み、盛大に副流煙を吐き出して一言。

「上等、上等。なんなら出てきたPS全機ぶつ飛ばしてもいいぞ。

……すまんやつば無し」

「こりやまた前言撤回が早いな！？」

「いや、だってほら残骸の回収とか面倒だし」

「実際に回収すんのはPS班だろ？ 何が面倒だよ！」

「指令飛ばすのとかさ、いろいろ」

「アンタ本当に俺らの上司かオイ！」

と、そこまで意味も無さそうな会話を二人の隣でぼんやりと聞いていたスヴェンが、口を開いた。

「あのさ、どうでもいいから詳細、教えてくれよ」

「おー、そーだったそーだった。スリングお前も見習いな、これが本来あるべき下士官の姿さ」

軽口を叩きながらロイズは机の引き出しをこそこそとひっくり返し、少しして一枚の紙を取り出した。

「こいつだよ」

「サノア市……オイコラ、テメエロイズ。舐めてんのか」

「カタコトになってるぞ。お前は頭の悪いチンピラフットラムか」

すかさずツツコミを入れるロイズにスリングが反抗する。

「俺らのSUスカイユニットじゃ市街地で有利に戦えねえぞ!？」

「なあに、PSの機動力がありゃ、市街地のフroot程度、どつてことないだろ」

「あなのな!」

スリングの言うとおり、彼らが搭乗するスカイユニットは空中戦に特化して開発された機体であり、市街戦は想定されていない。高機動力を誇る機体であるためロイズの言っている事もあながち間違っではないのだが、難しい注文ではあった。

「ともかく、もう決定した。大丈夫大丈夫、どうせやつサウスこさんらにはこんな辺鄙へんびな場所にPSを投入する余裕なんてありゃしないさ。行ってこい」

「チツ、しゃーねーな。その代わり、だ」

「あん？ なんだよヘタレ」

「ヘタ………………。はあ、その代わり俺らに副兵装として、コイルガン以外の実弾銃持たせる」

確かにスリングの請求は理にかなっていた。SUの主兵装であるコイルガンは連射がそこまで良いわけでもなく、さらに装弾数が少ないため、乱立する建物越しに敵を打ち抜くには不向きだからで

ある。

「やだね。と言いたるところだが、良いだろ。最近開発部の馬鹿が作った短機関銃サブマシンガンがあるはずだ。それを一丁ずつ持たせてやるよ」

ロイズは吸い終えたタバコをぐりぐりとガラス製の灰皿にねじ込むと、デスクに付いている電話を取って連絡を取った。

「うし、弾の手配もしたから、行ってこい。なに、お前らなら余裕だ。余裕」

「よく言うぜ……おいスヴェン、格納庫ドック行くぞ」

「ああ」

先導をきって歩き出したスリングに、スヴェンが続いた。

訓練と実戦      センジョウ（後書き）

主人公であるはずのスヴェンがなんか空気ですね。

## サノア市街地 セントウカイシ

『だあーっ！ 畜生あんのアマああああ！ くそっ！ いきなり実戦だあ！？ アイツは俺らを殺してえのか！』

スピーカーから音が割れるほどに大きな音量で、そんな声が流れてきた。

「うるさいな、仕方ないだろ、命令なんだし」

『仕方ねえ！？ サノア市つつつたら危険区域だぞ！ お前は どうしてそう平然としてられんだよ！？』

ぎゃーぎゃーと喚き散らすスリングの音が頭に響く。

「いやだつてさ、あんな事情聞いちまったら断るに断れないだろ… …?」

ぐ……、と言葉に詰まるような音がスピーカーから聞こえてきた。  
『 ええいつ！ くそっ、しょうがねえな……！』

スリングの感情が収まるのを見計らつて、スヴェンは話しかけた。「友軍が孤立してるんだろ？ さっきロイズ指揮官が言つてた話からすれば、それこそ、俺達が助けてやらないと全滅するくらいに追い詰められてる」

スヴェンが今言つたとおり、この緊急出撃には訳があつた。出撃指定区域から救援を求める通信が飛ばされていたのである。そこから最も近いのが、スヴェンらが駐留している『スカープ国軍第五基地』であり、そこから出撃が可能パワードスーツなPSが、ちょうど訓練から戻つてきた二人のそれしかなかったのだ。

「それに、斥候に飛ばしておいた偵察機によるとサウス軍の軍事兵力はフロントだけだ、なんとかなる」

『はっ、どうだかな。その偵察機だつて途中で調子が悪くなつたじやねえか。もしかしたらドライヴの影響受けまくつていかれちまつたのかもしれないだぜ?』

スリングの言っているドライヴとはいわゆるPSの燃料だ。数年

前に起きた技術革新そもその発端は、この新エネルギーにあると言っても良い。

ほぼ無限とも呼べる莫大なエネルギーを放出するその物質は、強すぎるが故に周辺にある精密機械などの調子を狂わせる事があり、それに特化した電波妨害装置ジャミングが作られている。スリングはその心配をしているのだろう。

「けど、ジャミングなんてPSじゃなくてもできるしな……」

『心配したところで始まらない、ってか？　　っと、そろそろ着くぞ』

言われてスヴェンは視線を前に向ける。倒壊したビルや、廃墟となったタワーが地平線の彼方からゆっくりとその姿をあらわし始めた。

「あれが、サノア市か……」

『ああ、あそこに死にかけの友軍がいるはずだ』

長丁場になりそうだな、とつぶやいた直後、

『WARNING！ LOCKED ME！』

という文字がモニターに表示された。

「なっ!?!」

『スヴェン！ 上だ!』

スリングからの通信、その意味を完全に把握するよりも先に、身体が動いていた。

二本の操縦桿ヴァーチカルグリップを操作し、フットペダルを踏む。Gが彼の身体を横に押しつけるとほぼ同時、スヴェンの機体のすぐ横を何かが高速で通り過ぎた。

地面に激突したそれは爆発し、巨大なクレーターを作り上げる。

「なにが……!?!」

機体を上に向けると、モニターの上部に辛うじて動く物体が写り込んだ。しかしそれはすぐに画面外へと飛んでゆく。

『フロートだ！ スカーブ軍のやつよりもデカイくせに格段に素早い！』

「くそっ！」

ペダルや操縦桿を何度か操作し、その形をモニターへ収めることに成功した。球体から八門の砲塔が突き出ている、訓練で使用されているフロートに酷似していたが、スヴェンにとってそれは見覚えのない形だった。おそらくそれはスリングにとっても同じだろう。フロートの姿を認識したコンピューターが軍のデータベースと照らし合わせ、『Search... UNKNOWN』と結果を表示する。

「新型か！」

『どうやらそうらしいな………来るぞ！ 気をつけろ、とスリングが言い切るよりも前に、その新型フロートは動き出していた。』

瞬時にモニターの画面外へ出ると、すぐさまこちらへ砲弾を放ってくる。

「ぐっ、……あああああッ！」

高速で機体を動かす度に身体へと襲いかかってくるGを無理矢理に耐えながら、スヴェンはフロートに照準を合わせ、トリガーを絞った。ついさきほど支給された短機関銃サブマシンガンの銃撃音が隔壁越しにも聞こえ、細かな振動が伝わってくる。

狙い通り、銃弾はフロートに命中した。だが、

「なっ！」

『なんだこいつ！ 軽くへこんだただぞ！？』

スリングが言った通り、ターゲットの外装は貫通していないらしい、軽くへこんだただけだ。

『くっそ！ なにが一徹甲弾（APDS）だ！ 全然貫けてないじゃねえか！ ……スヴェン！』

毒づきながら、短機関銃を背部にマウントすると、スリングのSユニットはマシンガンの代わりに一本の棒を手にしていた。スヴェンも同

じ判断をして、キーボードを打ち叩く。

『使用武器選択 B W - 0 0 2 高周波ブレード』

ジャギン、という音と共に、ロッドのように棒が伸びた。

これはSUに標準装備されている近接格闘用の武器だ。これには超音波溶接の技術が応用されており、目標の分子結合を破壊する高周波振動を起こす事で相手を寸断するのである。

『行くぞ、……………つらあああああ！』

スラスターからまばゆいばかりの炎を吹き出し、滑るような動きで敵フロートに肉薄するスリング機。スヴェンもそれに続いた。

直後、スローモーションとも思えるゆっくりとした動作で、フロートの砲塔がこちらを向いた。その後、一拍おいて砲口が火を噴いた。

轟音と共に砲弾はスリングへと飛来する。

『その程度で、……………俺を殺せると思うなっ！！』

高周波ブレードを持った右腕を上げ、速度を一切緩めないままにスリングは突進した。ある種無謀とも言える行動である。

だが、驚くべき事にその砲弾は真っ二つに切断された。

『スヴェン！』

「わかってる！」

ブレードを振り切ったスリングの機体を追い越してスヴェンは、敵の新型へ向けて猛進。Gの猛攻に悲鳴を上げる身体を無視して、フロートを両断した。

「……………つはー、はー……………」

接敵してからこの間わずか一分。急激に動いたせいか、スヴェンの心臓は激しく動悸していた。

『つはあ、なんとか……………なっ たな……………？』

「まさかこんなところでフロートが出てくるなんて……………」

『俺も思わなかった。けど、死なずに済んだな』

「ああ、良かった……………」

上がっていた息も幾分か収まり、サノア市に向かって再び機体を

動かしたその瞬間、

『WARNING！ LOCKED！』

という表示と共に警報が鳴りだした。しかも今度は一つではない、複数から同時にロックオンされている。見ると、スヴェンらが訓練で使っていたのと同じ四門の砲塔が突き出た砲撃型フロートが飛んできていた。その数、実に十二機。

『おいおい、またかよ！』

「新型をやったんだ、こいつらなんか目じゃない」

『……………あーっ！ もう！ 行くぞスヴェン！』

「ああ！」

『「戦闘開始だ！」』

## 勝敗は必ずしも数によらず      ランチェスター

目の前の画面が仄かに赤く点滅し、スヴェンの手によって音量を絞られた警報が、それでも機体の危険を搭乗者に知らせようと精一杯の努力をしている。

センサーに反応している敵影、そのどれもが訓練の仮想敵として使用されたフロートと同型だ。これは訓練ではなく実戦であり、失敗が「則絶命」へ繋がるという点では、同じではなかったが。

敵影を示す十二のオレンジ色の三角形が、こちらへ高速で向かってくる。

『スヴェン！ ちゃっちゃとやっちまうぞ！』

「……ああ！」

左手でキーボードを叩き、武器の呼び出しを行う。

『使用武器選択      サブウェポン SW001      三五型・八式短機関銃      使用弾丸  
APDS』

大型の銃を使用するPSは、銃に使う弾丸の種類まで細かく入力する必要が出てくる。弾丸によって微少なブレが生じるためだ。もともと、短機関銃ごときの射程ではさほど問題はないのだが。

ガシヨン、という振動と共に、先ほど背部にマウントしたサブマシンガンのロックが解除される。見ると、スリングも同じく銃を手にかけていた。

『つつーか、よく考えたら短機関銃こんなもん役に立つのか？ さっきの新型にやあ全く効かなかったが』

彼の言っている事もおかしくはない、だが、

「問題ない、想定外なのは新型アイツだけだ」

『へえ、そりやまたどうして』

「元々これを作った奴は、主にフロートやPSに使われてるニッケルや銅に対して使うように想定してる、さっきの新型、あれはどう見ても別の金属だ。強度が高すぎる」

『なるほどな。……………来るぞ!』

敵は二人に作戦を練る猶予を与えてくれるほど時間に寛大ではないらしい。フロートの測距用レーザーが照射されている事をモニターが告げる。目標との距離はおよそ七百メートル。

「スリング」

『ああ』

確認はたった一言、名前を呼ぶだけで事足りた。

それを合図に、二人が駆るSUは左右に散開した。向かって右がスヴェン、左がスリングである。そして三五型の銃口をフロート群に向け、トリガーを引いた。

細かな振動と射撃音、そして若干の排莢音。それらが混じり合い、破壊をもたらす銃撃となる。放たれた数多の銃弾は風を切り裂きながら敵フロートへと飛んでいった。

さすがに距離が遠すぎたのか、フロートには当たらず、撃破には至っていない。だが、群れをなしていた敵群が散った。

すかさずスヴェンがくれたフロートへ狙いを定め、

( まずは一つ! )

トリガーを引いた。

フロートには、獰猛な獣が牙で噛みついたかのような穴が空き、貫通に至らなかった部分はひしゃげる。もはや金属の塊と化した「それ」は、オレンジ色の炎を吹き上げながら、推力を失い、ゆるやかに落ちていった。

『Nice shot! 俺も負けちゃらんねえな』

「油断するなよ、次が来る」

『了解したよ、優等生』

ふう、とスリングが鼻のため息をする音が聞こえる。彼も三五型を動かし、フロートを撃破した。

残存敵兵力は砲撃型フロートが十基。

『救助を待ってる仲間もいる事だし、手早く済ませんぞ』  
「わかつてる」

答えると同時にスヴェンは操縦桿を倒し、フットペダルを踏んだ。スラスターが噴射を始め、徐々に、だが着実にSUはスピードを増してゆく。

Gの締め付けは苦痛ではあるが、この速さを手に入れるための代償だと思えば高くはない。

近づいてくるスヴェンに制御CPUが慌てたのか、コンピュータが慌てるなどというのはおかしいから、ただ単に射程距離に入つたからなのか、フロートは一斉にスヴェンへ砲を噴いた。

「……………あああ！！」

ガクガクと後ろに引きそうになる操縦桿を、無理矢理に前へ押さえつける。そして、瞬間的に右へ桿を倒した。

「ああああああああ！！！」

不意に重力が無くなるような錯覚を覚える。機体がサイドロールしているのだ。フロートが放った砲弾は機体すれすれのところを通過するが、命中はしていない。スヴェンは機体をフロートへ肉薄させ、すかさずトリガーを引き絞った。

目の前で二基のフロートが変形し、爆発する。これで数はあと八だ。

『どけ！ スヴェン！』

スリングからの怒鳴り声、それに反応して彼はすぐさま機体を下へ落とした。浮遊感を感じる間もなく頭上を砲弾が通り過ぎる。その砲撃手たるフロートを確認しようとカメラを上へ向けると、既にそれはスリングの射撃によって鉄屑と化していた。残り七。

「サンキュー、スリング！」

『んな事言ってる暇なんざねえぞ！ まだ残ってたんだ！』

「わかってる！」

言葉を交わしている間にも一基を撃墜。残りは六。

『……………つのやる！』

スリングが高周波ブレードを抜き、そのままの勢いでフロートを両断した、返す刀でもう一基。残り四基。

フロートを構成する部品の一つ一つ、それらの判別がつくようになるほどまで近づき、ろくな照準も付けず、スヴェンは銃撃を放つ。センサーから敵位置を読み取る、示しているのは自分の背後。

咄嗟に振り返り、そちらにもAPDSを喰らわせた。残りは二。

敵のCPUに判断させる時間などくれてやるものか、とでも言わんばかりにスリングとスヴェンがフロートを撃ち抜く。残りはただ一基。

『「あああああああ！！」』

二人の搭乗者は時を同じくして咆哮し、共に三五型の銃口を最後の一基に向け、同様にトリガーを引いた。

APDSの十字砲火にフロートの装甲が耐えられるはずもない。

外装は銃弾に喰い破られ、内部機構がはじけ飛び、制御CPUの塊が爆発する。

『っはあ……………はあー……………さすがにキツいなオイ……………』

「ああ……………所用戦闘時間二百三十秒か……………。思ったより時間を食った。行こう」

『りょーかい……………』

力なくそう答えるスリングに一抹の不安を覚えなくても無かったが、彼のSUが先導して動き出すのを見て、スヴェンもその後が続いた。

## 日陰者と巨大な兵器      メカニック

廃墟と化したビルが建ち並ぶ市街地を、スヴェンとスリングは飛んでいた。

サノア市、かつて北と南を結ぶ巨大都市として名を馳せたこの町に、昔のような栄華は無い。過去の遺物だ。あるものと言えば倒壊した建造物と、ひしゃげた標識くらいのもの。スヴェンの右隣に建っているのは戦争廃絶を訴えかける看板だった。

『俺達にとつちや、皮肉にしか聞こえねえな』

自嘲の色濃いスリングの声が流れてきた。

『それにしても、どうすんだ？ 通信兵から受け取ったデータに表示された地点に味方はいなかったし。闇雲に捜したところで見つかりはしねえだろ？』

確かに彼の言うとおりではあった。救難信号が発せられたとされる地点に味方は既にいなかったのだ。

『だからこうして、車輪の跡をたどってるんだろ』

その地点から、スカープ軍が正式採用しているジープの轍わだちが伸びていたのである。まるで自分達はあちらに行った、とでも言うように。

『ああ、でも、なんで場所を移動させたのかね？』

『たぶん、敵の襲撃を受けたんだ。救難信号は暗号化されてなかったらしいから、もしかしたら敵にもそれは行ってるかもしれない』

『まさか……あり得ないと言い切れねえが……サウス共にみつかるとやばいな』

『襲撃をかけたやつがいるとすれば、おそらく、敵はまだいる』

『くそっ！ 行くぞスヴェン！』

『了解』

二人の駆るSUは、速度を上げ、轍を辿っていった。

「ソロル、本当に大丈夫なのか？」

大丈夫なのか？ とはどういう意味だろう？ とソロルは考える。私の身を案じての言葉なのか、それとも「自分は助かるのか？」という意味なのか。

おそらくは後者だろう。戦場において、他人を気に掛けている暇など、兵達にはない。それは工兵であるソロルも同じ事だった。

「た、多分大丈夫だと、思います……」

「そうか。まあ、オレらにできる事があれば、言ってくれ」  
「わかりました」

答えたソロルの耳に、戦車兵と工兵の会話が聞こえてきた。

「にしても、PSに戦場のシエアはほとんど取られちゃって、オレらみたいな人間はそろそろ廃業じゃねえか？」

「まあな、最近じゃ、人間よりも無人で、PSより低コストなフロートの方が、楽でいいらしい」

「痛みのない代理戦争、か」

「おいおい、そんな事言えた立場か？ ごまんと殺してきた俺達が」  
「ちげえねえ」

そんなやりとりを横で聞きながら、ソロルはその場に座り込んだ。

(助かる……んでしょうか……?)

それを口に出したりはしなかった。そんな事したらそれを打ち砕くかのように、敵が出てくるような気がして、できなかった。

彼女らアパラ第五独立部隊は、スカープ国軍第五基地に向かう際、敵の襲撃を受けて撤退。使用されていない野球ドームに隠れていた。隠れてから、何度か彼女らの頭上を敵フロートが通過したが、幸いな事にそれらは彼女らに気付くことなく、通り過ぎていった。

こんな時には、いつも、彼女は妄想を膨らませる。幼少の頃から、ものを考えるのだけは得意だった。

(きっと大丈夫、きっとすぐに味方が駆けつけてくれる。PSが来

ればフロートだって倒せるし、基地に着いたらシャワーだって浴びられる。食事だってこんなレーションじゃなく、ちゃんとした物が食べられる……)

ソロルはうずくまって、静かに考えを巡らせていた。

突然、通信用の機械にかじりついていた通信兵が、声を上げた。

「救難信号に反応があった！ スカーブ基地から二機のPSが来るらしい！ 助かるぞ！」

その言葉に、ドーム内の兵達が沸き立った。やった、ついに、とそれに反応してソロルも顔を上げる。

(助かる……？ 私達が……？)

呆然とその言葉の意味を反芻する。それはすぐに実感を伴ってこみ上げてきた。先ほどの戦車兵が喜びに顔を緩めている。

「やつ

」

不意に、衝撃が全身を叩き飛ばした。

轟音が、耳を突き抜け、頭に響く。

爆発が、熱風が、ソロルの身体をなげた。

コンクリートの床に叩きつけられ、無様に転がる。

「そん……な………」

その瞳に映るのは、人の形をした黒い影。鋼鉄で形作られた、人を殺すための装身具。それに刻まれているのは、敵国軍の紋章。

パワードスーツ  
PSだった。

日陰者と巨大な兵器      メカニック（後書き）

読み返すと、死亡フラグのオンパレード。

## 黒いアスリートと赤い人      テキエイハツケン

ソロルは不自然な体勢で倒れたまま、その虚ろな瞳でPSをぼんやりと見つめていた。自分の身体の状況を鑑みるよりも先にPSへ目が行ったのは、常にPSやその他兵器と道を歩んできた工兵の性分故か。

PSは人間に例えるとするならば、アスリートのような機体だった。今までに見たPSよりも細い脚部パーツは、日々の練習によって鍛え上げられた運動選手のそれを連想させる。武装のような物は両手に一丁ずつ持ったハンドガンのようなそれと、腰に付けられた刀のような巨大な刃物くらいだ。

黒く塗装され、鈍い光を放つPS。その頭部に付けられたモノアイ型のカメラが、鋭く赤い光を放つ。

(……………もう、駄目ですね)  
状況は絶望的だった。

どんな種類の攻撃を受けたのかはわからないが、ともかく目の前にいる敵軍のPSが原因である事は間違いない。共に隠れていた仲間や、ジープも攻撃の衝撃でそのほとんどが消え失せていた。

「い！ おい！ ソロル！」

混濁する意識の中に、鋭く響くのは誰かの声。

「……………あ、……………」

「っ！ おいランチェス！ この子を運ぶぞ、そのジープ使え！」

このまま目を閉じていたいという本能に逆らって、目を開けるとそこには先ほどの戦車兵がいた。幸い彼に怪我らしい怪我は無いらしい。こちらを向いて、必死に何事かを叫んでいる。

「気付いたか！？ 逃げるぞ！」

その後ろで、PSが腕を動かし、

「くそ！ 速くしろ！ ランチェス準備は良いな！ 何！？ 鍵が

ない！？ 構わんエンジン直結でもなんでもしろすぐにごだ！」

手に持ったハンドガンの銃口を、こちらに向けた。

「……………げて下さい……………」

五十メートルも離れていないこの距離ならば、外れるはずもない。このままでは直撃し、死ぬしかない。

「あん？ なんだつて？」

「逃げて……………下さい……………！」

そこまで言つて、ようやく戦車兵が後ろを振り返つた。

「こりゃあ……………まずいな」

「そんな事を言つてる場合じゃありません……………速く、……………速く逃げて下さい。……………私は置いて行つてくれて構いませんから速く……………」

……………」

「おいソロル」

苦しげに息を詰まらせながら喚くソロルを叱るように、彼は口を開いた。

「覚えておけ、俺は自分の命を捨てるような事を言う馬鹿が大嫌いだ。もちろん、自分の命をむざむざ捨てるような行動を取る馬鹿もな」

「な……………」

何を、という声が出る前に、彼はその言葉を続ける。

「胸クソ悪い。こんな状況になつて、俺は大馬鹿になつちまったらしいな。ランチェス！ その子を頼む！」

どんっ！と。

名も知らぬ戦車兵は、ソロルを突き飛ばした。その直後、銃弾、いや、砲弾と言つても過言ではないほどの大きさを持つ弾丸が、彼に直撃する。

轟音が鼓膜を打ち振るわせ、弾丸が破碎したコンクリートがソロルの身体を殴打する。一拍おいて、彼女の手にかかかかった。

見れば、手には生暖かく、赤い液体がべっとりと付着している。

「……………あ、……………あああ……………」

これがなんであるか、もはやそれは不要な問いでしかなく、それを見間違っはすもない。紛れもなく、これは血だ。

「ああああああああああ！」

絶叫するソロルを抱き、ランチェスと呼ばれた少年が、エンジンのかかったジープに放り込む。

「隊長……！ アンタは大馬鹿だ……！」

嗚咽を漏らしながらその少年はハンドルを握る。その後ろでは、PSが彼らに狙いを定めていた。

後方を確認しながら彼はアクセルを踏み、ジープを発進させようとするが、何か溝にでもタイヤがハマったのか、上手く進まない。

「くそ！ くそ！ 動けてんだ！」

銃口がこちらに向いている。ぼやけた視界の中で、ソロルはおぼろげながらその事を理解した。

不思議と、死ぬ事に哀しみはない。ただそこに存在するのはどうしようもない虚無感。配属されて、仲間の名を全て記憶する間もなく戦死する。わたしは結局何もできなかった。

哀しさなど感じていないのに、何故か涙が溢れてくる。結局死にたくはない、という事なのか。それすらも、もうわからなかった。

突然、ガンツ！ という鈍い音が鳴った。

最初は撃たれたのかと思ったが、それではまだ意識がある事に説明がつかない。

目を開けて、確認する。そこにPSはいなかった。

いや、いなかった訳ではない。ソロルから見えない場所に移動していたのだ。すぐに元の場所に戻り、その姿を彼女達に見せた。だが、おかしな点が一つだけ。

そのPSは、右腕が半ばから取れかけていた。

『くそっ！ 車輪の跡はあのドームに続いてる、まずいぞー！』

スリングが叫んで伝えている場所、そのドームの前には、黒いP  
Sが佇んでいた。それは右腕をドーム内へと向けている。

『どういうこった、あのボロ偵察機が！ PSがいるじゃねえか！』  
「今はそんな事を非難してる場合じゃない！」

キーボードを叩き、武器を呼び出す。

『使用武器選択 ベリックウエポン BW-001 携帯型コイルガン』

この状況ではこちらの方が都合が良い、下手にマシンガンを使用  
すれば、ドーム内の味方にまで被害が及ぶ可能性がある。

コイルガンを右手に取り、スヴェンは数瞬で敵PSが伸ばしてい  
る腕へ狙いを付けると、トリガーを引いた。

圧縮された気体が抜ける音を、限りなく大きくしたような音がし  
て、金属の針が高速で撃ち出された。弾は狙い通り敵PSの腕の半  
ばに命中する。バチバチと青白い火花を散らしながら、腕が重力に  
従って垂れ下がった。

頭部を動かし、敵はこちらを見つめてくる。赤色のモノアイが、  
鋭く光った。残った腕のハンドガンをこちらに向ける。

『……畜生！ なんだってオレらはこう貧乏クジを！』

喚きながらもスリング機が、スヴェンと同じくコイルガンを背部  
から抜き出し、敵に照準を合わせた。

「気をつける！ 敵の型はまだわからない、PSのデータを通信部  
に送ってもらう！」

『それまでにオレらがやらねえや良いがな！』

黒いアスリートと赤い人 テキエイハツケン（後書き）

……すみませんなんかすみませんどこがとは言いませんがすみません。

だが自分はこれをグロとは言わない。敢えてこのままの表記を貫き通します。

……ごめんなさい石を投げないで下さい。

## 臨戦態勢

## ガイシュウイツシヨク

『どうする！ PSと一戦交える以外に道はねえぞ！』

焦りを伴ったスリングの音が、スピーカーから聞こえる。

「そんな事はわかってる！」

モニターに映る黒いPSは、目を模したモノアイでこちらを静かに見つめている。あちらから仕掛けてこないのは、こちらの出方を窺っているからか。

しばらくの間にらみ合いが続く。不意に、スリングとの通信に、別の信号が介入してきた。それはうるさいくらいのノイズが混じっていたが、コンピューターの処理によって、鮮明に聞き取れるまでに雑音は排除された。

『……あー！ あー！ 聞こえるか teme ーら！ 聞こえたら応答しろ！』

それは基地からの通信だった、さらに言うならばスヴェンらの上司にあたるロイズからの通信である。スヴェンがそれに応えようとすると、スリングが不満をぶちまけた。

『 teme ーこの野郎！ 斥候の偵察機トロンは何してやがる！ PSが居たぞ PS がッ！』

口角泡を飛ばす勢いでわめき続けるスリングを制するかのようには、データが送られた。受信されたそれはモニターの隅に小さく表示される。

そのウィンドウには前方の黒いPSと同じ3D画像が添付されており、暫定的な命名として、その上部に「陸上用機体スプリンター」と書かれていた。

『やれやれ、やっと繋がったか。それが送られたデータから割り出した敵PSの推定性能スペックだ。飛行能力は無いが、SUと同じか、それスカイユニット以上の機動力を持つてるらしい。ったく、なんだってサウスにそんなPSが配備されてんだか……』

人ごとのようにぼやくロイズ。

確かにサウス軍にはSUを上回るPSを開発するような技術は持ち合わせていないはずだった。

もし、今日の前に存在するPSの性能が送られてきたデータと合致するとするならば……。

「おい、それってかなりヤバインじゃねえか？ 二対一とはいえ」  
基地にいるロイズへ向かって不安げに問うスリングの声、思わずスヴェンも声を漏らした。

「そう……なるよな？」

しばしの沈黙が続く、それを破ったのは能天気なロイズの声だった。

「なる！」

「逃げるぞスヴェン」

ロイズの返答に、スリングは一瞬でそう言った。冗談で言っているように聞こえない、事実、彼のSUは微かに身じろぎしていた。  
「敵前逃亡は軍法会議」

その言葉に、今正に回れ右をして逃げようとしていたスリング機の動きがピタリと止まった。

「……………」

「ちなみに私が基地（じい）での最高権力者だから。死刑よ死刑？」

「……………」

「ああ、そこに味方がいるってことは敵前逃亡の他にも、味方を見殺しにしたって罪状も追加だな」

「……………」

「こりゃ死刑確定ってことか？ お前らが帰ってきた時が楽しみだ」

「戦うぞスヴェン」

ついにスリング機が携帯型コイルガンを手に取った。

「おー、やっとやる気を出したか、私は嬉しいよ」

「何を仰いますやら！ オレは最初っから殺やる気出してました！」

「よーしそれじゃあ行ってこい」

「Yes Ma'am!」

叫び声と共に、スリングが先手を打って出た。続けざまにコイルガンを連射する。

それに対するスプリンターが一瞬だけ身をかがめたかと思うと、次の瞬間、消えた。

消えた、とするにはいささか不適切かもしれない。正確に言うならば、彼らの視界から外れたのだ。スプリンターのいた地点に微かな砂埃が巻き上がっている事に気付いたスヴェンは機体を上方に向ける。果たしてそこに目標は佇んでいた。

「上だ!」

右腕がないのにも関わらずその機体は絶妙なバランスでビルの上に立っている。鋼鉄の塊であるはずなのに、乗られたビルは大きな音ひとつ立ててはいなかった。

左手に持った大型のハンドガンが、スヴェンを狙う。

「!」

それに呼応するかのように、素早くスヴェンは機体を横にずらした。後を追うように、弾丸がコンクリートの地面を抉ってゆく。

そこから先は反射的だった。

右手に装備しているコイルガンをスプリンターの胴に向け、二連続でトリガーを引く。

だが、スリングと結果は変わらなかった。目標はまたも飛翔すると、音もなく道路に着地する。そして、左手の銃を背部にマウントすると、腰に付けられた巨大な刃物を左手に取った。それは装備されると同時に淡い光を発し、数秒が経つ頃になると真っ赤な光を発するようになる。

「熱刀身か!? 随分原始的なもんを!」

「だからって油断はできない、全力で行くぞ!」

「言われなくてもわかってんだよ!」

キーボードを打ち叩き、スヴェンは機関銃を手を取った。スリングは高周波ブレードを手に行っている。

『さあ、シヨータムだ筋肉野郎！』

**臨戦態勢**

**ガイシュウイツシヨク（後書き）**

生存報告がてらに更新。

## 撤退の頃合いと援軍のタイミング      レインフォースメント

『つるあああ！』

スラスターから戦場に似つかわしくないほど煌びやかな噴射炎を出しながら、スリングがスプリンターへと肉薄する。自身の高周波ブレードが届く範囲に敵が入ると同時、スリングの機体は腕を振り下ろした。だが、相手はそれすらも読んでいたかのように身をかがめて避ける。

ゆらりゆらりと揺れるような、つかみ所のないリズムを刻みながら、それでいて不意に鋭く動く。敵の機体はまるでインファイトボクサーのように変則的な近接戦闘を繰り返してくる。

「……スリング」

緊張で声がかすれている事を感じながら、スヴェンは静かに呼びかけた。返答は一瞬。

『りょーかい、右か？ 左か？      っとー！』

突き出された熱刀身ヒトサーベルを辛うじて躲かわしながら、軽い調子で言っている。だが彼にもそこまで余裕はないはずだ。通信は手短に済ませる。「どちらでも」

『迷ったらやつぱ、左だよなっ！』

叫ぶような声と共に、前方のスリングが左へ機体を高速移動させた。それに伴って黒い敵影がスヴェンから見えるようになる。あらかじめ構えておいた三五型機関銃をそちらに向け、トリガーを思い切り引き絞った。

タップショットやバーストショットのようなまどろっこしい制約など付けていない。ただ目の前にいるPSを破壊するために、フルオートの銃撃を放つ。コンクリートの地面が抉れ、廃墟ビルの窓が割れ、盛大に砂埃が巻き上がる。弾が切れなければ、そのままずっと打ち続けていたかもしれない。

もうもうと立ちこめる粉塵が晴れた。

「……………な!？」

驚愕するようなスリングの音がスピーカーから流れる。スヴェンも同じ気だった。

スプリンターは、静かにそこで佇んでいた。最初に撃ち抜かれた右腕以外はただ一つの外傷もなく。

『どういこうった! なんだアイツは!』

なんだ、と聞かれたところでスヴェンには答えられるはずもない。「そんなこと俺にだって」

分かる訳がない。そう答えようとした、その、刹那。

スプリンターが脚部を折り曲げると、モノアイを凜猛に光らせた。「!」

一瞬で、相手はこちらの前にまで近づいていた。距離にして約一米ートル。敵は三十メートル超の距離を、瞬間的に移動した事になる。スプリンターはそのまま左腕を振り上げた。

咄嗟に三五型機関銃でヒートサーベルを受け止める。数秒もすると三五型は熱で溶け出し、最早、銃としては用をなさなくなってしまうった。

よろけ、たたらを踏むようにスヴェンのSUがよろける。

『くそっ!』

スプリンターの左側面を取ったスリングが毒づきながらコイルガンを撃つ。それすらも簡単に敵は回避した。スリングの方に気を取られた、その隙を突いてキーボードを打ち叩く。

『使用武器選択 BW-002 高周波ブレード』

右手にブレードを持ち、体勢を立て直す暇もなくそれを振るった。ヒートサーベルに当たったブレードは、しかし上部を切り裂くだけに終わる。

スプリンターはヒートサーベルを構え直し、倒れ込んだスヴェン機のコクピットを狙っていた。

『スヴェン! 避ける!』

その声に反応してペダルを踏んだのは、幸か、不幸か。狂ったよ

うにスラストターが噴射され、炎が敵を焼く。ビルとビルの間、狭い空間で使われた熱は、当然の如くスヴェンにも降りかかった。

モニターが青白く光り、網膜にそれが焼き付けられる。

「っがああああ！」

だが、意味はあつたらしい。気がつくと、スヴェンはプリンターから離れたところに倒れていた。すかさず操縦桿を操作し、体勢を立て直す。

敵は半ばから切れた、いびつな形のヒートサーベルを構え、スヴェンは朦朧とする意識の中、高周波ブレードを構える。

双方が刃を交えようとした、その瞬間。

『そこまでだ』

どこかで聞いた事のあるような声が響き渡る。良く聞いてみると、ロイズのそれだった。音源であるらしい後方上部を見上げると、

『やれやれ、あんまり数は動かしちゃならんつてのに……』

ざっとみただけで十はいるだろうか、そこにはそれだけのSUが浮いていた。

どうやら彼女は展開されたSU群の中心にいるらしい。白くペイントされたSUから、その声は広がっている。ロイズの駆るSUが、何かソナーのような、高い音を発する。それに呼応するかのように、SUがスプリンターを取り囲んだ。

『……さて、そのスプリンター！。観念しな』

撤退の頃合いと援軍のタイミング

レインフォースメント（後書き）

早め早めに更新したい。

## 一段落ついた戦いと増えた疑問      リターン

『お前には二つの選択肢が存在する』

  厳然たる態度で警告の通信を全チャンネルに乗せて発しているのはスカープ国軍所属のSUスカイユニットに搭乗しているロイズ・サムマツカー大佐その人である。その声が向けられているのは、多数の銃口が突きつけられている黒いPS    スプリンターだ。片腕が獣に喰い破られたかのように引きちぎれたその機体は、その勧告を身じろぎ一つせず聞いている。

『一つ目は、このまま我々スカープに捕虜として下ること。もちろん身の安全は条約に則そつって保証してやる。情報提供の要請及び拷問はしないと約束する』

  戦争はゲームではないが、ルールの無い殺し合いではない。北と南サウス。二つの大国がしのぎを削り合っているこの戦争にも、しっかりとした条約ルールが交わされている。今ロイズが言ったのは捕虜の扱いに関するそれである。実際に全ての戦場において守られているかは怪しいところだが、スヴェンらが所属しているスカープ国軍第五基地ではその可能性は無かった。

  沈黙しているスプリンターに対して、まったく気にもせずロイズは続ける。

『そしてもう一つは、ここで死ぬことだ。情けはかけてやる、痛みを感じる間もなく死ねるだろうよ。    さあ、どうする？』

  疑問を投げかけられた相手は全く動きを見せない。頭部のモノアイ型カメラも赤く煌々とした光を放ったままだし、左手の熱刀身ヒートサーベルも相変わらず熱せられ、鈍い光を放っている。

『私も暇じゃないんでね、さっさと決めて貰えるとありがたいんだが』

  痺れを切らしたらしいロイズが早く決めると促した、その瞬間。何の予備動作も無しに、スプリンターが手のサーベルで目の前に

いたSUの脚を斬った。斬られた箇所が自重でずれ、その機体は仰向けに倒れ込む。

「な！？ やつてくれるね、後者ってことかよサウス風情が！」

慌てるようにして他のSUがスプリンターへ銃口を向け、射撃を放とうとする。だが、銃が火を噴くよりも前に、黒い機体の背部から盛大に黒い煙が吹き出した。

「煙幕！？ 味な真似を……！」

これではどこに撃てばよいのかわからない、下手をすれば誤射の可能性だつてある。混乱に陥った部隊を尻目にスプリンターは走り出した。スヴェンやスリング、スカープ軍の機体達に背を向けながら、全チャンネルに通信を通したらしい。コンピューターで変えてあるのか、合成音声のような音がその場にいた全員に聞こえた。

「前者でも後者でもない。ワタシが選ぶのはワタシの軍属と同じく第三の選択だ。スカープに恨みは無いが、邪魔をするというのなら、次は本格的に出る」

変換がなされているからなのかわからないが、一切の感情が消え失せたかのように、その声には抑揚が全くなかった。平坦な、それでいて冷淡な口調。

「なんだと……？ 何が言いたいんだよお前は！」

まだうつすらと残っている煙幕を無視してロイズが銃撃を放つ。

だがそれはいとまたやすく回避されてしまった。

「繰り返し、次はない。このことを頭に入れておけ」

疑問に対する回答は無い、ただ事務的とまでいえるほどの通信が入るだけ。

スプリンターはそれだけを言い残して逃げ去っていった。

「くそっ！ 何なんだアイツは！」

全兵士に聞こえていることも忘れていいのか、ロイズが毒づく。だがその機嫌もすぐに普段のそれと変わらなくなった。

「まあいい、救護班！ 生存者がいるかはわからんが、早急に生存者の捜索及び保護にかかれ！ スヴェン、スリング！」

『うあ!?!』

「えあ!?!」

いきなり声を掛けられて驚いたような声を上げる二人。そんな態度を意に介する風もなく、彼女は続けた。

『よくやってくれた』

いつものような荒々しい口調とは一転した、静かな、子供を褒めるかのような言い方だった。

短くとも、それにこめられた意味合いは計り知れないほどに大きいものだ。

『……オレらは、味方を助けられなかつたんですよ?』

それに対してスリングが、珍しく弱々しい口調で言った。

『それでもだ、よくやってくれたな。それにお前らの行いは全くの無駄<sup>コウビツト</sup>つてわけじゃあないらしい』

搭乗席<sup>コクビツト</sup>内で救護班から送られたデータを一瞥して、そこから得た情報を読み上げるロイズ。

『生存者がいる。全滅よりはマシだ』

一段落ついた戦いと増えた疑問      リターン（後書き）

変なところで切れたのは仕様です。タイトルに反してますね。

## 残った命と深い傷      セイゾンシャ

「志望理由は？」

「サウスを、……サガフフロントの奴らを叩き潰すためです！」

椅子に座った指揮官      ロイズ・サムマツカー大佐の前で、最敬礼をしながら答えたのは一人の少年兵だ。一瞥して、歳は高校を出たばかりというところだろう。その後ろに起立しているスヴェンやスリングと、そう変わらない。

彼らは、スカーブ国軍第五基地に帰還していた。大量の遺体と、ごく少数の生存者を引き連れて。ドッグタグがあるため、戦死の確認は遺体が無くとも可能だが、そのやり方はこの基地の最高司令官であるロイズが嫌っているために通る事があまりなかった。

今現在、二人の目の前で繰り広げられている光景を一から説明するととなると、少々の時間を要する。

まず、ロイズの質問に対して臆することなく返答している少年兵の名はランチエス・クリエント。階級は戦車科一等兵である。

「私怨、か？ 自己の感情に任せるだけじゃ、敵は倒せない」

「確かにそれもあります。自分は目の前で信頼に足る隊長を殺されました。      ですが、それ以上と言える理由がしっかりと自分の胸には存在しています」

自分の胸に握り拳を押し当てながら、その少年ははっきりと答える。

彼は先の戦闘での生き残りだ。運良く「ごく少数」に潜り込んだ兵士の一人。あと数名、前戦闘での生存者はいるのだが、その中でも彼、ランチエスは非常に運が良いらしい。というのも、彼以外の人間はそのほとんどが何らかの怪我を負っていたのである。

「その理由つてのも聞かせてもらおうじゃないか」

「自分が今まで話してきたのは、壊すという行為です。しかし、自分が本当に成し遂げたいのはただ一つ。……『守る』ことです」

「守る？」

微かに眉を上げるロイズ。それを意に介するでもなく彼、ランチエスは続けた。

「隊長は、自身を犠牲にしてまで他人を守り抜きました。自分はその意志を汲みたいのです」

ですから、となおも続けようとするランチエスを手で制すると、ロイズは話し出した。

「お前の言いたい事は十二分によくわかった」

「……なら」

「駄目だ」

呼び出されたスヴェンとスリングがロイズの部屋に入ると、そこでは彼とロイズがなにやら問答を繰り返していた。しばらくそのまま待っている、という指令が下ったために、二人は立ちながらその会話を聞いていたのである。ただ黙って聞いているのは趣味が悪いな、とスヴェンは考えたが、命令である以上逆らえるはずもない。二人は何もせずに待つしか無かった。

とはいえ、会話は不可抗力的に耳へ入ってくる。元々聞くつもりがなかったとしても、嫌でも内容は頭に入ってきた。

どうやら、少年の戦車兵　ランチエスが自分もPSのパイロットに加えて欲しい。と頼み込んでいるようだ。先ほどからロイズはその懇願をはねのけているのだが、ランチエスもランチエスで一向に退く素振りを見せない。

確かにその要求が認められないというのもおかしくない話である。そもそもからして彼は戦車科の人間なのだから、PSの操縦技術を持っているわけがないのだ。そんな人間に、貴重な戦力であるPSを任せる訳にはいかない。ただ単に戦力が減るといっただけならば良いが、今の戦局において大切なのは「機密保持」の一点に尽きる。サウスに比べて技術で勝っているスカープ国は、その開発技術を相手に盗まれるわけにはいかないのだ。今のところ戦局はこちらの優位で進んでいる。だが、もしもサウスのPSを生産する技術がこち

らを上回った場合。勢力図は瞬く間に塗り替えられることだろう。つまり、戦闘技術で劣る彼が敗北し、その機体が相手に回ると厄介なことになりかねないのである。

「何故です！」

「まず第一に、お前は経験が圧倒的に足りない。PSに乗るのなら適正が必要だし。訓練が少なくとも百六十八時間は必要だ。不眠不休でやったとしても一週間。実際にそんなことができる人間はいないから、どんなにがんばっても三週間はかかる」

「時間がどれほどかかっても自分は構いません！」

声を荒げているランチエスを無視して、ロイズが指を立てた。

「第二に、そもそも使えるPSがない。無いものに乗せるのはたとえこの国のどんなお偉方でも無理だろうよ。今この辺りにあるのは、フロートの残骸か、ぶっ壊れたスクラップ同然のパーツくらいのもんだ」

「……くっ！ 失礼しました……！」

悔しげに顔を歪めながら、ランチエスは踵を返した。思わずスヴェンが横に避ける。それで気付いたのか、ロイズが二人を手招きした。

「あー、そーいやお前らを呼んでたな。すまん、手間取らせた」

スリングがそれに答える。

「ああいや、オレらは別に構わねえよ。けど、どうしたんです？」

今の

「PSに乗りたいたんだよ。全く、そんな暇があったら怪我人の救護でもしてろってんだ」

「けど、そんな言い方は……」

「いいんだ、今のアイツは怒りに我を忘れてる。守るだのなんだの言ってたが、ありゃあどう考えても自分で考えを整理しきれてなかった」

その言葉にスヴェンは問いかける、特にこれといった証拠があるわけではない、だが、の頭には確信があった。

「でも、最終的には、彼にもPSを与えるつもりなんだろう？」

「……………チツ。なんでそう分かるんだよ」

舌打ちをしながら、いらだたしげにロイズは答えた。

「以前もそうだった」

隣でスリングが思い出したとでもいうような顔をする。

「ああ、確かに。オレらの時も似たようなもんだったしな」

「そついやそんなこともあった。けど、今回は状況が違う。お前ら  
を呼んだのは他でもない、あのランチエスって野郎の面倒を見て欲  
しい」

「おいおい、救援に間に合わなかったオレらに、今更どうしろって  
んだよ？」

「何もしなくていい」

ロイズはあまりにはつきりと言った。だが、それでは先ほどの発  
言と矛盾する。

「特別なことはなにもいらない。ただ、アイツの怒りを和らげられ  
ればそれでいい。普段から積極的に会話をしたりとかな」

「つまり、それはアイツと友達になれってか？」

「まあ、それに近い。そこまで親密になれと言っているわけじゃな  
い。ただ単に、見守ってやってくれ。ランチエスは今、不安定な状  
態にある。特別に三日間の休暇をやる。 やってくれるか？」

はん、とスリングは笑った。

「やってくれるか？ そんなもん決まってるよ。それ以前に、アン  
タはオレらに命令すればなんでも思うがままじゃねえか」

「違う、これは命令じゃない。個人的な『お願い』だ」

それを冗談だと受け止めるには、彼女の顔は真剣に過ぎた。

「……………仕方ねえな」

「頼む。 スヴェンも、やってくれるか？」

「俺はそんな『お願い』なんて聞きたくはない。俺は俺個人でアイ  
ツと友達になる。あくまでこれは頼まれたからじゃない、なりた  
いからなる」

「ありがとう」

さて、とスリングはロイズに背中を見せた。

「それじゃあ、ひねくれたあの少年をビシッと立ち直らせに行くとするか！」

「立ち直らせるっていうのは、少し違う気がする」

「そんならどうだっていいだろうが。叱咤してやるのには変わりはないよ」

「まあ、そうだけどさ……」

「じゃあ行くぞ。久々の休暇だ。暇つぶしには丁度良い」

「暇つぶしのために友達になるのかよ。お前は」

「言葉のあやってもんだ」

## 小心者と傷心者?? ティーミット

潮の香が混じった風に吹かれながら、草がまばらに生えている地面へと腰を下ろしたまま、海を眺めているのは一人の青年である。

?? スカープ国軍第五基地。

沿岸部に位置しているここは、様々な小国との繋がりも少なくなく、それ故にこの基地に配属されている軍人の人種も多い。

彼、ランチエス・クリエントも経歴が違うとはいえ似たようなもので、出身はスカープでは無かった。彼の故郷は非軍国主義国家であり、この戦争に対して日和見を決め込んでいた。そのせいだったのかもしれない、戦争初期の時点で彼の国がサウスの襲撃を受けたのは。彼の頭の中にはある光景がしつかりと焼き付いていた。多数のフロートが砲撃を繰り返し、逃げ惑う人々を殺している光景が。

もちろん、サウスの軍とて何の理由もなく襲撃をかけた訳ではない。一般市民に知らされてはいなかったものの、その国は犯罪に手を染めていたのである。それは全世界で禁止されていたある兵器を開発するための研究だった。危険すぎる上にそれがどこで行われているかがわからなかったため、サウスの軍はフロートによる国規模での殲滅を敢行したのだという。

だが、ただの市民であり戦争とは無縁の生活を営んできたランチエスにとって、それは加害者の単なる言い訳に過ぎなかった。

確かに非軍国主義の国である彼の国が「兵器の開発」などといった極めて軍事的な分野の研究をしているとなれば、それは問題だろう。研究内容が国際的な犯罪に繋がるとなればなおさらである。

だが、だからといって国そのものを破壊し尽くす必要が果たしてあったのかどうか……。

ランチエスが襲撃の理由を知ったのは、逃げ延びて数日後のことだった。聞いたところによると、サウス軍が発表を執り行ったのは

襲撃が終わってからだという。

通常、戦争に関係のない軍事報復を行うのなら、何らかの発表をした後にそれを始めるはずだ。

にも関わらず、なぜその時は発表が遅れたのか？

ランチェスはすぐに気がついた、簡単なことだ。

サウスが発表した軍事報復の理由は、全てが嘘だったということ。

それが真実であるという証拠は無い。だが、彼はなにか確信めいたものを感じていた。

そして、その予感は的中した。

数週間が経過した後、彼の故郷がサウスに占領されていたのだ。

その報を受け取ってまず感じたのは絶望でも失望でも悲哀でも無常感でも虚無感でも孤独でもない。

??義憤。わき上がった感情は、自分でもどうしようも無いほどの怒りだった。

そのような理由が背景にあり、ランチェスはサウスに敵対している軍、即ちスカープ軍に志願したのである。

「よう。災難だったな」

と、背後から声をかけられた。いつのまにか近づいてきていたらしい。聞き慣れない声だと思いつつも、ランチェスは振り返る。

その目に映ったのは同じ年ほどの、二人の軍人だった。

「災難だったな」とはよく言ったものだ。と、スリングが発した言葉に少し感心しながら、スヴェンはスリングが話し始めるのを黙って聞いていた。

しかしながら、振り向いてはくれたものの一言も声を出さないランチェスの姿に、スリングも困っている様子だった。両者とも何を話せば良いのかわからない、といったところだろう。

沈黙を破ったのはランチェスだった。物憂げな表情を変えないま

まに、スリングを見て問いかける。

「???どうしたんですか?」

慌ててそれに答えようとするスリング。

「えーっと……その、あれだ……」

だが、自分が意に沿った言葉がうまく見あたらないようである。すぐにスヴェンの方へ顔を寄せ、小さな声で話し出した。

「おいスヴェン、何とかしてくれ」

「いきなり言われても、無茶だな。俺だって何のとっかかりもなく話題を見つけるのは難しい。スリングが難しいんだから、俺にできるわけないだろ?」

「いやそうなんだけどよ……」

あーっ、くそっ! と金髪の頭をかきむしり、再びランチェスに向かう。彼の髪がたっているのは、その仕草を幾度となく繰り返ししているせいなのではないかと、スヴェンはその動作を見る度に思っていた。

「ランチェス!」

いきなり名前を呼ばれて驚いたのか、彼は目を見開いてこちらをまじまじと見つめてきた。

「どうして、僕の、名前……」

「ロイズ……お前が話をした女上官から聞いた。オレはスリング、スリング・ロンウエルだ。こっちの黒髪野郎はスヴェン・フロント。階級はどっちも上等兵だ。??お前に話がある」

「な、なんですか?」

困惑した表情でランチェスは尋ねた。その目にはどこか不安そうな色が混じっている。

数秒の沈黙の後、スリングは口を開いた。

「???オレ達と、友達になってくれ」

「……………え?」

それはランチエスにとっても予想外だったらしく、彼はぽかんとした表情で、間の抜けた声を上げた。

小心者と傷心者?? ティーミット (後書き)

なんとか死なずに済んでいます。

## 機密研究 その陰に??? シンジケート

「く……くくつ……はははははっ！ ダメだ……！」

「おまつ！ スヴェンテメエ笑うなそこに直りやがれ殴ってやる！」

「だって、だって……そんな、いきなり何を言うのかと思つたら『友達になつてくれ』なんだぜ？」

「うるっせえ！ オレだって悩んだんだよ！ どうやって話を切り出すか！」

必死で弁明を計っているスリングの姿に、また笑いがこみ上げる。スヴェンはもう横隔膜の痙攣を自分では止められなくなっていた。

「だいたいからして、あの女上官が俺たち<sup>ロイス</sup>に下した命令が無茶なんだよ。オレらにあんなことできるとでも本気で思つてんのかよ、アイツは！」

「できないと思つてるなら、最初から任せはしらないと思う」

そりやそうだけどよ……とスリングはようやく口の運動を控えた。と、スリングは近くで立ち尽くしている青年に気づいたらしい、

きまりの悪そうな顔で話し出す。

「その、なんだ……つまりだな、オレはお前と友達になりたいわけ……」

スリングの顔を、彼、ランチエスは呆けた表情で眺めていた。いきなりのもので何が何だかわからない、とでもいうような顔だ。

すかさずスヴェンが横やりを入れる。

「それはついさっき話した、話が堂々<sup>ループ</sup>巡りしてる」

「だーっ！ 仕方ねえだろオレだって努力してんだよ！」

ともかくっ！ と人差し指をランチエスに向け、スリングはにやと笑ってみせる。慣れていないのか、随分と不自然な笑い方ではあったが、人間関係を円滑に進めるといふ目的で使うのならば、それは許容範囲に入っていると云えた。

「『仲良くしようぜ』ってこつた！」

「結局、最初の一言だけで事足りたよな」

「なんだってお前は毎回オレの言葉に突っ込みを入れてくるんだよ！？」 お前はそんな性格だったか！？」

「あ、あの……」

授業中に教師の間違いを指摘する直前のように控えめな動作で、おずおずと手を挙げたのはランチエスである。

それに気づいたスリングは再び顔にぎこちない笑みを作って尋ねた。

「おう、どうした！」

「さつきから何の話をしてるんですか？」

「??なるほど、そういう事でしたか……」

その言葉を発したのはランチエスだ。

説明が下手なスリングに代わってスヴェンがランチエスに様々な事を話した。ロイズが彼に冷静になってもらいたいと思っている事などを。

それを直接本人に言ってしまうてはあまり意味が無いようにも思えたが、それ以外に方法を思いつかなかったのだから仕方がない。友人になったからといって彼が件の戦闘くたんで受けた衝撃を忘れられるとはスリングには思えなかった。

つまりだ、とスリングが口を開く。

「あの指揮官サマも、何も考えずにお前をしっかりとつけてた訳じゃあねえってこった。……ところで、だ」

「? 何か？」

「お前は どうして、そんなにPSに乗りたがるんだ？」

「聞いてたでしょう、サウスを倒したいんですよ」

何を今更、という様子でランチエスは答えた。それをほとんど無視するような形でスリングが続ける。

「あんな人型兵器に乗ったところで、得られるもんは何もねえ。オ

しらはまだ人を殺した経験はねえが、その内必要になる場合もあるかもしれない。お前は、アレに乗る?? 『壊す』理由はあるのか?」  
その問いを聞いたランチエスはしばらく考えるような仕草を見せた後、木訥に語り出した。

「自分がこれから言うことは、その『壊す』に足る理由ではないかもしれない。」

「そういう事が……」

今度はスリング達が頷く番だった。彼、ランチエスが話した理由はさして長くないものの、現職のPS乗りであるスリングらを頷かせるに十分なモノだった。

自国を襲撃したサガフロントから、自国が受けたような理不尽な襲撃から、他国を守るため。それに並行して、自国が行っていた研究についての情報を手に入れること。

黙っていたスヴェンがそれを受けて、額に手を当てて考え込む。

「単なる復讐心からじゃないってのはわかった。けど、妙だな……」

「あん? 何がだよ?」

「その国が行ってた研究の事だよ。聞いた話によると、その研究は非軍国主義国ミリタリズムの中で行われてたにしては、規模が大きすぎる」

「つまり、何が言いたいんだ?」

「戦争をバカスカやってるこのご時世に、軍事に頼れない……どちらかの国に加勢しておいしい汁を吸えない国では、そんな研究に使うような多額の資金を得るのは難しいはずなんだよ」

スヴェンの言葉から何事かを察したらしいランチエスが、戸惑うような声を上げた。

「まさか、研究を幫助した『何か』があるってことですか」

「おそらくは。……なんらかの組織が資金を提供した可能性は捨てきれない」

スリングがまたも質問する。

「ちょっと待て。って事はだ、サウスは関係無いって事になるんじゃないのか？」

「サウスがランチエスの故郷を襲ったのは変えようがない事実だ。……けど、少なくとも何の理由も無しにやったって訳じゃないんじゃないか？ 情報が少ないからわからないけど、そもその原因がサウスにある可能性は限りなく低い。?? 問題なのは、兵器開発をそそのかした組織がどんな目的で動いているかだ」

淡々と考えを述べていくスヴェン。

ランチエスはぼつりを漏らした。

「確かに違和感はあるんですけど。しっかりと考えてみればおかしかったです。自分がいつものもなんですけど、あの国の長達には、情報を操作して研究を行うような頭は無い」

「確定とは言えないけど、あり得ない話じゃあない。その研究について調べてみよう。ロイズ大佐に頼めば軍のデータベースくらい見せてもらえるかもしれない」

スヴェン達は、基地内に向けて歩みを進め始めた。

「なんてこった……」

誰もいない部屋の中、革が張られた椅子に座って一人苦悶の表情を浮かべているのは、長く流麗な黒髪を持つ女性。この基地の最高責任者であり統率する権限を持つ、ロイズ・サムマツカ？大佐である。

彼女が肘をついている大型の机。その上には数枚の紙を束ねたものが乗せられていた。

それに記されているのは、先の戦闘で戦ったPSが負傷した際に落ちた腕の解析結果である。何行にも渡って長々と綴られた報告から読み取れることはこうである。

????あの陸上用機体、プリンターはサウスで作られたもの

ではない。

機密研究 その陰に??? シンジケート(後書き)

来月からは更新間隔が短くなる………といいなあ………。

「妙に性能が良いから、まさかとは思っていたが……」  
彼女、ロイズは革張りの椅子に身体を預けながら額に手を当てる。自分の意志に関係なく、独り言が口から漏れた。

ロイズの前に置かれているのは数枚の紙片。先刻、刃を交えた陸上用の機体『スプリンター』。その腕部パーツを解析した結果がそこには記されている。

彼女の部下であるスヴェン上等兵が戦闘によって破損させた腕を、基地内でも指折りの名メカニックに様々な検証を要請しておいたのだ。ほんの数時間で使用されている合金の種類や配合比率、強度とパーツ毎の推定馬力まで割り出したその人物にはほとほと頭が下がる。短時間で終了してこそいるものの、分析結果の信頼度は低くない。そこまで突拍子もない数値がたたき出されていたわけでも無くなによりその機体と対峙したロイズの個人的評価ともさほど離れていなかったからである。

最終的にメカニックが下した判断は、『このパーツは少なくともサウスの物ではない』ということ。

その事実が彼女にとって重い物だった。

第三勢力。二つの大国が争っているなかでそのような軍勢が現れることが危惧されていなかった訳ではない。むしろ今までその存在が露呈しなかったことの方が驚きだ。

確かに今までも歩兵を主とした軍隊を持つ小国や、ゲリラ戦を仕掛けてくるレジスタンスは少なからずいた物の、どれも取るに足らないような小さな勢力としてしか認識されなかったのである。

だが、今回は違う。

PSを独自に開発するには莫大な資金と技術の他にも、いくつもの条件が必要となる。それは研究施設であったり、パーツを量産するための工場であったり、様々だ。少なくとも広大な土地は必要に

なる。資金を提供してどこかの国に開発を依頼するという方法も無いわけではないが、そもそもPSを生産するに足る技術を有しているのはスカーブ国だけであつたはずだ。情報の流出という線もありえなくはないが、限りなく薄い。

その兵器を駆動させるためのエネルギー源たり得る唯一の物質『ドライヴ』を入手することも必要になる以上、自然とPSの開発が可能な地域は絞られてくるのだが、彼女が得た情報を統合してみた上でもそのような地域はなかった。

「一体全体、どこがどんなルートで手に入れたんだ？ あの機体は……」

また声が漏れる。

と、この部屋で唯一の出入り口である重々しい雰囲気醸し出す木製の扉から、およそ似合わないような軽い音が三回続けて発せられた。

「入りな」

木板一枚を隔てた向こう側にいるであろう人物に向けて、入室を促す。

「失礼するよ」

「何だ、お前か……」

そこから入ってきたのは白衣を纏った一人の男である。スマートな銀縁の眼鏡を着用しているが、ボサボサの髪と無精ひげがそれに勝る野暮ったさを演出している。

「アレ？ なんか悪かった？ 色々とお困りかなーって思ったから来たんだけど」

言いながら彼は白衣のポケットから数枚のマイクロディスクを取り出した。手のひらに収まるサイズのディスクケースにラベルが貼られている。

「困ってるかと聞かれたら、確かにはいと答えるしかないんだけどな……」

その言葉を聞いて、男は乾いた笑みをその顔に浮かべる。

「でしょ？ ボクはそれを提供しに来たんだよ」

彼の名はジャン・クリスト、当基地の兵器研究施設に勤務している。施設内での地位はほとんど平社員のようなものだが、事実上もつとも軍に貢献しているのは彼として問題ない。

風の噂では、変わり者が集まる研究所という場の中でも彼は群を抜いているらしく、金や権力に目が向かないというのだ。

基本的に彼は兵器開発を行っているが、それ以外の分野にも幅広く手を伸ばしているとも聞く。

時折、思い出したようにロイズの元へやって来ては、何故か彼女へ助力を惜しまない人物である。

「君が欲しがっているであろう情報さ」

表情を変えないままにジャンはロイズに歩み寄り、ディスクケースを机の上へと置いた。

「情報？ んなもんお前の権限で調べられる範囲なんてたかが知れてる。すまんが必要ないと思うぞ」 軍によって情報が規制されている今では、階級の低い彼に閲覧が可能な情報は限られてくる。ロイズがあの手この手を使ってかき集めたのにも匹敵するようなモノを彼が持っているとは考えにくかった。

「まあまあ、ここはひとつ見てみてくれよ。頼むから」

とはいえ、ジャンがここまで食い下がるのも珍しいことではあった。

「仕方ないね、ほらこっちに寄越しな」

何枚かのディスクの内、一枚を適当に選び出して、手近に置いてあったタブレット型のコンピューターにそれを入れる。微かな駆動音の後、ディスプレイにディスク内のファイルが表示された。

「これは……、何かの兵器設計図、か？ なんだってこんなもんを……」

「きわめて単純かつ明快に説明してあげよう。それは『ドライヴ』のエネルギーを利用した新型爆弾の設計図だ」

「なっ……！！ そりゃあ、開発が禁止されてるはずじゃないか！

なんでこんなモノがここにあるんだ!？」

「そう、その爆弾の開発はどんな立場の国だろうと開発が禁止されている。君が言いたいことはボクにだって分かる」

その兵器を開発することは固く禁じられている。今ではスカープの小学生だって知っているようなことだ。

だからこそ、おかしいのだ。

「設計図が存在しているということ自体がおかしい、そう思っているんだらう?」

黙したまま何も語らぬロイズに、ジャンは少なからず肯定の意を読み取ったらしい。何事もなかったかのように語り出した。

「数年前、一つの国が世界地図から消えた」

その語り口には、どこか昔を惜しむような声色が備わっていた。

地図を描くのは勝者の仕事 トシシヨウメツ(後書き)

ぼちぼち更新ができるように頑張ります。

## 研究員と最前線の兵士      インターセクト

「世界から国が消える。それは歴史上を顧みても、そう珍しいことじゃない」

研究員用の白衣を身に纏った男、ジャンはロイズの前でも縹渺とした態度を崩さぬままに、そう続けた。その声はどこかすがれた管楽器の音色を思わせる。

「しかし、これまでの正史から見て、その国が『消えた』理由はあまりにも異質だと言える」

黙って話を聞いているロイズを見据えて、彼は真剣な面持ちになった。

「『消えた』というのは少しおかしいかもしれないね。より正確を期すなら『消された』というべきかな？」

「サウスに、ってことか……」

問うようなジャンの口調を前にロイズは逡巡の後、そう答えた。

「ご明察。理由は……そこまで推測できてるなら、まあボクが言わなくても分かるか」

「話の流れで大体掴めた。つまりそういうことだろう？」

「そう。武力制裁だ」

「それで、さっきのに繋がるわけだ」

「流石は若くしてそんな役職に就いてる大佐殿だ。飲み込みが早い」

「こつでもなきや務まらないさ。それで、質問があるんだが」

「ボクに答えられる範囲でなら、お答えするよ」

「どうして知ってるんだ？」

何故、そこまで突っ込んだ事情を知っているのか。ある種でつかみ所が無いような彼に対して、大抵の疑問は用をなさないので、しかし今回は明瞭にしておく必要がある。

「私でも集められないような情報をお前が持ってきたことは何も今だけのことじゃないが、今回に限って言えば不自然だ。平常時なら

ともかく、今は厳戒態勢が敷かれている。徹底的な情報統制の下で、一研究員に過ぎない人間がそんな代物を提供できると思うほど、私は間抜けじゃないつもりだ」

射るようなロイズの視線を受けながら、その標的であるところのジヤンは先ほどまでとは打って変わって重々しい面持ちで口を開いた。

「『クリューガネル』」

「……何だ、そりゃあ」

突拍子もなく彼が発した言葉に驚きながらもロイズは頭の中の引き出しを探ってみたが、そんな単語はどこにもしまっていないかった。「消された国の名前だよ。知らないのも無理はないだろうね。何せ、世界の力関係の中でも比較的弱く、そして小さい国だったから。さて、質問の解答に移ろうか」

徐々に遠ざかっていく波の音をBGMに、スヴェンら三名は基地の正面ゲートへ向かって歩いていった。

「……なあー、スヴェン。思ったんだけどよ」

尖った金髪を揺らしながら、先頭を歩いているスヴェンへとスリングが問う。

「? どうしたんだよ」

「あのさ、オレらつてただの一兵卒じゃん」

「そりゃあ、言っちゃダメだよ」

軍人とはいえ、彼らの身分は比較的低い。三年の間士官学校に通ってそこそこの成績で卒業しても、まだ大した戦果も挙げていないスヴェンとスリングは、未だに単なる上等兵だ。志願兵であるというランチェスに限っては最下級兵の二等兵よりも一つ位が高いだけの一等兵である。

今後どれほどの昇進があるかはスヴェンも知り及ぶところではな

いが、しかし今現在において、彼らはさしたる権力も持っていないが、最前線で戦う兵士に分類される。無数にいる内の三人というわけだ。カテゴリーミス

「それがどうかしたのか？」

「いや、だから、その程度の人間相手にデータベースとか見せてくれんのかなと思って」

「まあ、とりあえず訊いてみるしかないだろ。駄目なら駄目だったで、その時に何か方法を考えれば良い」

「大丈夫なのかよ……？」

柄にもなく不安げに問いを重ねるスリングを尻目に、スヴェンは歩幅を変えないまま基地へ向かい続けたのだった。

研究員と最前線の兵士    インターセクト（後書き）

四ヶ月ぶりな更新。生きてます、生きてますよ。ただ最近いろいろと忙しくてこちらをすっかり忘れ……もとい手をつけられない状況にあったわけで。

次はいつになることやら。

世界規模の昔話 ジャン・クリスト

「さて、質問の回答に移ろうか」

ジャンは少しためらうようなそぶりを見せるが、それも一瞬のことと、ゆっくりとだが確実に言葉を紡ぎ始めた。

と、それを遮るかのように出入り口である扉が荒々しくノックされた。間髪入れずにくぐもった声が聞こえてくる。

『おいロイズ！ アンタからの指令はいちおう完遂した。そこでひとつ頼みたいことがあるんだけどよ、頼めるか！？』

どうやら扉の向こうにいるのはスリングらしい。彼だけということはないだろうから、おそらくスヴェンと、言動から察するにランチエスも一緒だろう。

「取り込み中だ、後にしな」

『後つてどれくらい後だよ』

「少なくとも一時間」

『急ぎなんだ、そんなに待ってられっかよ』

「じゃあ今日はあきらめな」

『権限的に通るかどうか微妙なところだから頼みに来たんじゃねえか。審議にかけられんの待ってたら三日どころじゃ済まねえんだぞ』

「ともかく今は無理だ。後にしてくれ」

『テメ上等だ畜生！ このドアぶち破って直接力才向き合わせて話し合おうじゃねえか！』

不意に声が途切れる。数秒をおいて後になにやらガツンという大きな音があった。

あきれたようなスヴェンの声がそれに続く。

『お前、本気で学習能力皆無だろ』

『言うに事欠いて学習能力がないとききましたかこの野郎、しかたねえだろあの上官が力才出さねえんだからよ』

『それでもこの扉にドロップキックかますなんて馬鹿以外に表現が

思いつかないんだけど』

『だから、これをぶち破りでもしない限りはオレの要求が通ることがねえんだから』

『いやお前半年前にも同じようなことしたよな？ あおのときはドロップキックじゃなくて正拳突きして右腕の骨にキレイなヒビ入れたんだっけ？ これ、木製に見えるけど実は中にチタン合金板入ってるし地味に電子ロック式だし、軍人とはいえ素手で開けられる代物じゃないと思うんだけど』

『はあ！？ それマジ情報かスヴェン、どうしてオレが行動する前に教えなかつたんだよ！？』

『言おうした瞬間にはすでにお前は宙に浮いてた。それ以前に、半年前にもちゃんと教えたはずなんだけど……』

『やめる馬鹿を見る目でオレを見るな！』

彼らの声が聞こえなくなるのに、さほど時間はかからなかった。念のため部下にこの部屋周辺の人払いを頼んでから、ジャンに説明を促した。

「……………すまん、話を始めてくれ」

「あ、ああ……………わかった」

どこか面食らったような顔の彼も、その言葉でようやく気を取り戻したらしい。

「結論から言おう。『消された国』クリューガネル、ボクはこの出身だ」

「……………」

ロイズは彼の話の口に挟むようなことはしなかった。大方の予想がついていたというのものもあるが、それだけではない。

独り言を言うように、もしくは、自分自身の昔話を語るかのよう

に。  
記憶をゆっくりと深淵から引き上げるようにして、彼はたどたどしくも続きを話そうとする。

会話中に覚えていた違和感はこれか、とロイズは内心の疑問が瓦解するのを実感していたのである。

郷愁、あるいは憐憫。

彼の話し方や表情の端々から、そういった感情が伝わってきていたのだ。

「制裁は、ひどいもんだつたよ。ああ、そりゃあひどかった。モニター越しとはいえ、見ていて気分の良いものじゃないね。戦闘力でPSに劣るフロートでも人間相手には十分すぎる戦力だった。生身の人間に兵器は圧倒的なまでの効力を発揮した。どんなに強い人間でも丸腰じゃ兵器の前ではあまりにも無力だ」

うつむき、自身の行動に対する悶絶を感じているのだろうか、顔を苦悩にゆがめながらも彼は口を閉じようとはしない。

「恐怖感は無かった。ボクらは脱出艇に乗っていたから。そこには他にも何人かがいた、同じ研究施設のメンバーさ。研究対象は例の新型爆弾。そのデータをもって、ボクらは逃げようとしていたんだ」  
話すことが義務だと自分に言い聞かせているのか、贖罪だと自分を叱咤しているのか。それはわからない。

「フロートがボクらを狙う心配は無かった、ジャミング波を発していたからね。機械に精通してる奴らが集まってたんだから、別段おかしなことじゃない。索敵走査用のレーダーを攪乱させるプログラムは誰かが組んでたよ」

まあ、とにもかくにも。とジャンはひとつ息をつく。

「ボクらはサウスの武力制裁からうまく逃げおおせたってわけだ。

それが良かったのか悪かったのか……たぶん、悪かったんだろうな。それも、とびきり最悪な状態を作り出してしまった」

うつむいていた彼は面を上げる。

そこには後悔の念がありありと浮かんできた。

ジャンはロイズが手にしているタブレット式PCの画面を指で示す。

「設計図が今ここに<sup>それ</sup>ある理由はわかっただろうか？ もうひとつ、教

えなくちゃならないことがあるんだ。これが世界に知れ渡れば、もしかすると予期せぬ形で今大戦が終わるかもしれない。その可能性は十二分にある」

ロイズが視線を走らせたPCには、先ほど読み込んだデータがそのまま表示されていた。

「ドライヴ使用式兵器の設計図は、ボクだけが持っている訳じゃないんだ」

彼の言っていることがいまいわからなかったが、少し考えを巡らせると唐突に理解することができた。

「まさか……！」

目を見開いて、ジャンの顔を正面から見据える。

ロイズ自身がはじき出した答えは、ジャンが先ほど口にしたようになるほど『最悪の状況』だ。そして、彼が言ったことはまさしく正鵠を射ている。大戦が終わるといふのは、あながち夢物語でもない。まさに『予期せぬ形』で終わりを迎えるだろう。

「そう、設計図は逃げ出した他の研究員たちも所持している」

世界規模の昔話 ジャン・クリスト（後書き）

思い出したように更新。

## 幕間 ショウキユウシ

「納得いかねえ」

無然とした様子でそう呟いたのはスリングだった。

「何が」

「全部」

周りが喧噪に包まれているにも関わらず、しかしスリングはそれに負けない声量で答えた。

「納得いかねえんだよ」

「だから何がだって」

「だから全部だって」

「オレらがランチエスの相手を任せられたのは分かる。けどよ、それに関連する情報を調べる許可をもらおうとしたら、あの女上官ロイヌの答えは『後にしてくれ』だぞ？」

いかにも不満たつぷりだとも言いたげな表情で、彼はフォークでボイルされたニンジン突き刺した。

「あの人にも、都合はあるんだと思いますよ」

と、スリングをいさめるように言ったのはランチエスだった。彼はコーヒーが注がれたカップを傾けながら周囲に視線を泳がせている。初めて来る場所だから間取りを確認しているのか、少しでも戦場に出張った経験があると、こういった癖が付いてしまうことも珍しくない。

「にしたってよ、昨日だけならともかく、今日も無理たあどういうこった？」

今は昼時、ここは食堂。

訓練を終えた兵士やPSの整備を終えた工兵が一樣に席へ着き、食事をとっていた。

休暇中であっても空腹はやってくる。スヴェン、スリング、ランチエスの三人もその例に漏れず、昼食をとっていた。

「またあとで、もう一度頼みに行ってみるか」

朴訥とした調子でそう提案したのはスヴェンだ。それに対してスリングは露骨に嫌そうな顔をする。

「はあ？ どうせ無理だろ、また断られるに決まってる」

「そうとは限らないんじゃないか？ 可能性は無いこともない」

「いいや無理だね。アイツは俺らに会おうともしねえよ」

「じゃあ、どうするんだよ」

スヴェンの問いにスリングは「決まってるんだろ」と吐き捨てるように答えた。

「データベースに勝手にアクセスすんだよ」

「おい」

「なんだよ」

「お前、馬鹿だろ」

「じゃあその馬鹿についてきてるお前も馬鹿だな」

「それなら、ついてかない」

「スイマセン来て下さい」

軽口を叩きながらも、彼らの顔はあくまで真剣だ。

時折後ろを確認しつつ、スリングは潜まった声で言う。

「おいお前ら、抜かるなよ」

「抜かるも何も、お前が何しようとしてんのかがいまいち分からないんだけど」

「だからだな、今から基地のホストコンピューターにアクセスしようって話だろ？」

「いや、『だろ？』って言われてもな……」

後頭部に手を当てて、スリングに対し呆れたような表情で言うスヴェン。

「あのう、スリングさん」

と、そこで最後に立っていたランチエスが尋ねた。

「あん？ どうしたよ？」

「アクセスするというのは良いんですけど、どうやってするんですか？」

「どうやってって……普通に」

「普通、と言うと……？」

「諜報部かどっかに行つて頼んでみようかと」

「あの、多分それは無理じゃないかと思うんですけど」

「……え？」

「だから僕達は、許可をもらおうとしてたんじゃないんですか？」

「……あー……」

二人のやりとりを眺めながら、スヴェンはスリングに向けて冷たく言い放つ。

「やっぱお前、馬鹿だろ」

幕間 ショウキユウシ(後書き)

気付いたら三ヶ月も放置してた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6803i/>

---

Powered play!

2011年2月3日23時10分発行